

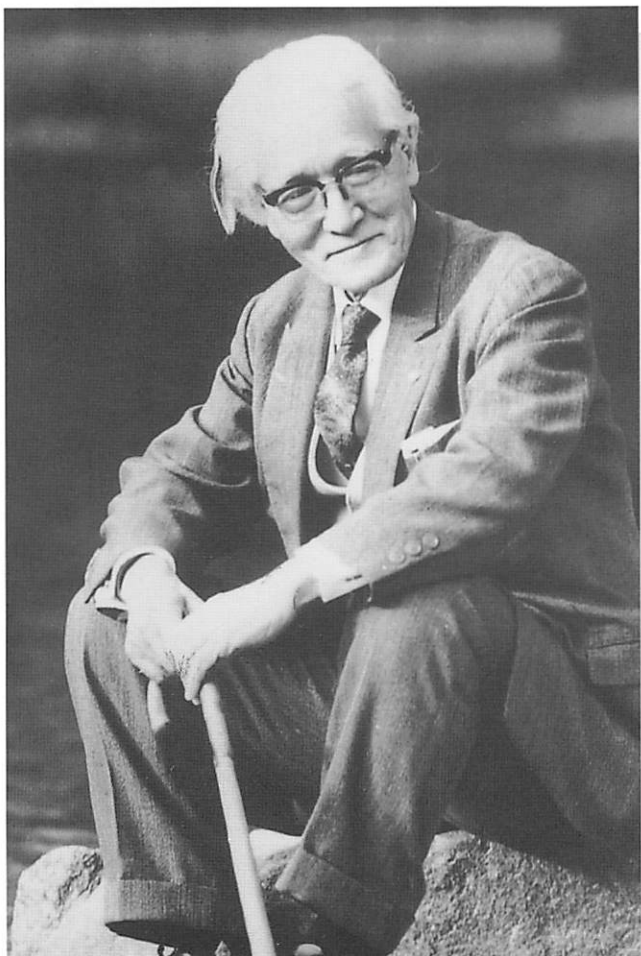
新

歌人群像

春日井瀧

●「狂言綺語」の向こうに

●大塚寅彦●



歌との出会い

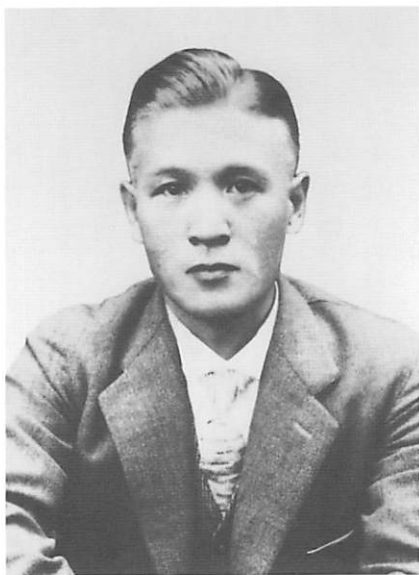
あかつきのかはたれやがて澄みゆかむ茜
となりく山の端の空

春日井瀧という歌人の歌で、筆者が真っ先に思い浮かべるのはこの一首である。歌碑にもなっているこの歌は極めて古典的な格調をそなえ、短歌以外の何ものでもない堂々たる姿で、しかし未明の暗闇が少しづつ清澄な明るさを帯びてくる、一日のうちのもっとも繊細・微妙な時間帯を描いている。四句目の「茜」が読み手の心に差し入る美しい律調である。

歌会始にも入選したこの一首を巻頭に据えた歌集『吉祥悔過』が上梓されたのは、作者八十一歳の時である。それまでは歌集をもたない歌人であった瀧であるが、文学への出立は早く、幼少時にはすでに俳句を投稿するなどしている。

吾子ゆくかゆくかと母は門に立ち羽織の襟を折りたまひけり

『吉祥悔過』と同年に出版された歌集『海石榴』には、青年時に過去を回想して歌った作



長男・建が生まれたころの春日井 瀧 (1938年)

品が収められている。一九二五(大正四)年には纏められ、一九二六年(昭和元年)に上梓される予定だった。後年の「私の素顔」という一文で、「若い頃丹念に清書した私集はあ

るが、公にするのがどうも恥ずかしく出版の機会を逸して今日になっている」とある。瀧の長男である春日井建が「八十歳の初花」と書いた人生の境涯の歌集と、若き日の青春の歌を同時に読むことで、いっそう瀧という歌人の歩んだ人生が多角的に見えてくる感がある。

瀧は一八九六(明治二十九)年の五月二十八日、玉篠庵と号した冠句の宗匠である父佐藤深三郎、小松検校の代理箏曲指南である母かなの次男として名古屋市東区東田町に生まれている。かなはいわゆる「清洲越し」の

お嬢様で、深三郎との結婚には興味深い劇があったらしい。その母をスペイン風邪で早く失ったのも瀧の不幸だった。

さきの掲出歌は、十歳の時に神戸市の真光寺塔頭修善院に弟子入りし、故郷を離れる時の見送りの母の姿が歌われている。

得度して僧名が慈阿行善となった瀧であるが、後年「師仁善僧都が歌会始に詠進されたのを見て、自分も大きくなったら歌を書こうと思ったのが今日の機縁となった」と書いており、この出家体験が短歌への志をもたらしたということになる。

故郷の名古屋から遠く離れた神戸での修行僧としての生活は、十歳の子供にはどれほど心細く辛いものであったか。『海石榴』の自序には、同じ雛僧の友「青ちゃん」との辛い境遇での心の交流が書かれており、涙を誘う一文となっている。

しかし『吉祥悔過』の歌に、「ある時は歴代天皇の御名読みて雛僧のわれ布施を受けたり」という一首もあり、結構したたかで利発な少年僧でもあったことがうかがい知れよう。中学二年の夏に還俗して故郷に帰った瀧は、のちに「短歌」(中部短歌会)の主要同人となる柵橋古刀雄、江口季雄らと交わり、文学の世界に邁進していくこととなる。

青春と短歌

中学三年の頃から、名古屋新聞に歌を投稿し始める。この時に太田水穂の知遇を得たことが、後の「潮音」参加につながった。

一九一四(大正三)年には中学を卒業し、神宮皇学館に入学する。全寮制の学校で、瀧は『海石榴』の序文を書いた大塚龍夫(行流)を知り、大塚のすすめで一九一五年に創刊されたばかりの「潮音」に入会し、太田水穂に師事する。

花丁子の露にくちづけ
笑み給ふ君が片頬
を照らす月かな

栲衾白き君が頬しるがねの月にも似たる
水鏡かな

君をおもひ心もそらにわたりたる
汐合川
の夕あかね雲

これやこの旅路に見たる
佐久少女黒髪長
きこの佐久少女

『海石榴』には、こうした十代終わり頃の初々しい青春歌を見ることができている。瀧自身が言うように、この歌集に収められた「潮音」の初期の頃の作には、吉井勇、石川啄木、与謝野晶子ら新詩社系の歌人の影響が強く感じ

春日井 瀧

られよう。

四首目は、師の太田水穂の「みなかみの佐久の入り山いくへ山おした、なはり暮れて来るかも」（『雲鳥』）を思わせる古調のしらべであり、後年、水穂からの手紙に「あなたの歌にはやはり潮の香りがする」と書かれてあったというエピソードからも、瀧にとつて若き日に「潮音」の同人となり水穂に師事したことは、その歌業に大きな影響があったことがうかがえる。

一九一八（大正七）年には神宮皇学館を卒業したあと、市立名古屋商業学校の教諭となり、以後、教職の道を進むこととなる。

「潮音」を退いた後、「珊瑚礁」を経て翌一



春日井瀧と政子（1936年3月）

九九（大正八）年には「霸王樹」の創刊同人となり、橋田東声、臼井大翼と交遊をもつ。

「霸王樹」での活動は、一九五五（昭和三十）年に「短歌」の主幹になるまで続くことになる。それゆえ「短歌」は東声系とされて歌壇系図に載ることがあるが、瀧自身は潮音系とあったほうが妥当であり、また中部短歌会自体は様々な流派の歌人が集まり、今日という同人誌的風貌の、一概に何々系とは言えない会である。

一九二一（大正十）年に春日井ときと結婚したことにより、佐藤姓から春日井姓に変わり、のちに二女をもうける。そのため佐藤姓時代の消息が歌壇から失われたところがある。

そして一九二三（大正十二）年には中部地方の各派が合流して名古屋短歌会（のちの中部短歌会）が結成され、歌誌「短歌」を創刊する。この時にも瀧の様々な尽力があつて多くの有力な歌人が集う雑誌となった。

逆縁に妻子喪ひし日をおもふ御子を亡く

せし友に嘆くとき

『吉祥悔過』の一首だが、瀧は最初の妻ときと長男を一九二七（昭和二）年に喪つている。その後、二人目の妻を迎えるが、その間にもうけた男女の子とも逆縁となり、結局、その

妻とは一九三三（昭和八）年に生別する。

しかし、一九五六（昭和三十一年）年に書かれた「私の素顔」では、「私は三十二に不幸に逢い、長い間独身であったが、「青垣」社友から昭和八年「短歌」の同人となった在東京の鳥居政子と結婚したのが昭和十一年」となっており、二度目の結婚については触れてない。この独身時代、当時の「短歌」編集発行人の浅野保が営んでいる芸者置屋に、二人の幼い娘を連れて遊びに行ったりもしたという。

よくのびて髪あげむ日もすでに近し唇も
頬も耳もすでに亡母なり

「短歌」の一九三三（昭和八）年一月号に載った歌である。後年、建は「春日井瀧論」で、「妻を亡くした初め、恐らく瀧は沢山の歌を作ったであろう。しかし当時の歌のすべてを破棄する。鳥居政子と再婚するにあたって、過去の思い出となるあらゆるものを捨て去った」としている。人生の転機として瀧は政子との新しい生活を始めたのである。

この鳥居政子との間に一九三八（昭和十三）年、長男の建が生まれる。

七つきくらの釦胸につけ死につきし船橋
良三はわれの教へ子



皇学館大学教授を退官するとき、片づけが終わった研究室の空の本箱の前で建といっしょに (1975年)

国敗れて何の山河ぞ護らしむと若木のさ
くら散らしめし日や

これらは後年、回想して詠んだものだが、戦争の時代の中で失った教え子や歌友も多かっただろうことは想像に難くない。「短歌」も一九四四（昭和十九）年の四月号に瀆の「廢刊之辞」が掲載され、旧派の流れを汲む歌誌「国の花」への合流を余儀なくされるが、

それも翌年、終戦の年には廢刊になっている。一九四六（昭和二十一年）八月、「短歌」は復刊し、引き続き浅野保の編集発行により号を重ねていく。

困難を越えて

瀆は戦時中、中部神祇学校長として神職を養成したという理由で教職追放となる。冒頭にあげた一首は、「天日も暗き思いに生活して来た」瀆の願いが込められた「朝空」の歌だったのだろう。教職追放は一九五一（昭和二十六）年まで続くこととなる。

一九五五（昭和三十）年五月、浅野の死去に伴い、九月号より「短歌」の編集発行人となる。そしてそれを待っていたように若き春日井建が作品を発表するようになる。

邂逅得たるえにしかなしく過去の寒温は
いまわれにあたらし

汝を逃かせし日の夕茜悔いしより狂言綺
語になじまずなりぬ

大空にひとつ浮べる白雲の飄々として生
きぬかむとす

まるで人生の総決算のように、これらの歌

を含む『吉祥悔過』が上梓されたのは一九七八（昭和五十三）年だった。長く連れ添った今の妻への思い、そして死別した妻への思いが、長い月日を経て一つの集に収められたのである。様々な過去への思いを、若き日の浪漫的な表現スタイルとは異なる、深い年輪を感じさせる確かな実感に裏打ちされた言葉で紡ぎだしている。だが、作者が「狂言綺語」として一時は葬った『海石榴』の歌の古き良き時代の純粹な浪漫性も、こうした境涯の歌に更なる奥行きを与えている。稲葉京子は瀆を評して「気骨と情愛の人であり、野心に遠くむしる含羞の人であった」としているが、それはこうした歌からも充分感じられる。

瀆は人生上の困難に出会った人であるが、困難をそれと感じさせない明朗な性情であり、友人、後輩たちに慕われた。「短歌」の編集発行人となつてからも稲葉京子、春日井建ら当時の若い才能を育成し、また建の友人たち（浅井慎平、荒川晃など）の結婚式での仲人を務めたのも、若者たちに慕われていた証左となる。

瀆の死後、歌誌「短歌」の編集発行は建に引き継がれ、更なる発展と歩みを続けている。

（おおつか・とらひこ）「中部短歌」